

大谷大学図書館蔵『越後蒲原郡小女感応記』について

——略解題と翻刻——

菊池 政 和

本稿は、大谷大学真宗総合研究所平成20年度一般研究「近世仏教文化文獻の基礎的研究」というテーマで、石橋義秀教授を研究代表者として調査を進めた研究成果の一部を報告するものである。「石橋班」としてはすでに、二〇〇九年三月一三日にその研究成果中間報告書を公開し、調査を進めた文獻について、その一部については解題を付し、その他のものについては基礎書誌データとして巻末に掲載されている。ここで紹介する『越後蒲原郡小女感応記』の書誌調査は本井牧子氏（筑波大学助教）によってなされた。本井氏によるその書誌データをもとに、ここに再掲する。

整理番号 餘大7141（林山文庫）

写本 袋綴装 一冊

法量 縦二一・二糎、横一五・六糎

匡郭 なし

版心 なし

表紙 共紙

半葉七行 十八字前後詰 漢文体 全十四丁（含原表紙）

はじめに『越後蒲原郡少女感応記』（以下『少女感応記』と略称）の慷慨を記す。

越後蒲原郡金津の羽生田村に伝吉という医者に天性孝心の娘があったが、にわかに死んでしまった。しかし体は温かであり、時折悲喜の声を上げて六日目に蘇生した。

娘の語るところによると、命終えて黑暗処を通り抜けると十五六歳くらいに見える化僧に出会った。その僧からもらった櫛を噛んでついていった。やがて現れた宮殿の麗しさに歓喜の涙があふれた。堂中には数多の僧がいたが従弟の僧も混じっていた。その名を「木端」といい、禪寺で修行したが七年前に亡くなっていた。木端は父母が悲歎するから帰れと言うが、自分は聞き入れなかった。叫び声をあげながら逃げ隠れたがついに追い出されてしまった。再三還るよう言われたが、今度は帰り道がわからない。化僧から授かった八句の陀羅尼は帰路を弁えるものであった。帰路、石を荷う嬰兒たち、河におぼれる者、火に焼かれる者、流れる刃に身を切り裂かれる者、だんだん細くなる橋を渡らされ落ちて猛火に焼かれる者、熱湯の大鑊に入れられる者などを見た。これらは他の命を奪うような大罪を犯したものの受ける苦しみであった。小罪であっても必ずその報いは来るものだと言われ、自分自身もその報いを受けていることがわかった。そこでかの僧が言う、人界に還ったら三宝を念じ、出家の所有する三衣を洗うべしと。こうして息を吹き返したのであった。

娘は語り終わると、さらに、伯父に対して博奕の罪を懺悔して三宝に帰せよと勧めたことがきっかけとなり、遠近の村人たちのわが先祖の生まれ処について娘に尋ねるところともなり、大変な評判となった。

以下、越後正福寺住円策の評釈が続く。円策は小女のこの話を自分の弟子が直接聞いたといい、小女の語るところは一見たわごとのようなではあるが、そうではないとして、経文等を挙げてその証左としている。具体的な感応譚をあげておき、その後でしかるべき証左となる經典や記録をくどいほど掲げる方法論は、ほぼ同時代に勸化僧として生きた肥後の月感（たとえばその著『分略四恩論』）や真言僧・蓮体（たとえば『礦石集』）などに通ずるところである。

『少女感応記』では、円策の識語に付け足すような形で、阿弥陀の奇瑞感応譚が続く。その意図するところはにわかには決しがたく、ここでは結論が出せないが、この雲州西方寺の縁起として紹介しているものがある。月感の唱導録『近世善悪華報録』がそれで、その現存本文についての翻刻はすでに稿者によって試みたところであるが（注）、ここにあらためて当該の感応譚をあげる。

近世善悪華報録 卷下

仏法力益感部第七話 焼念仏之縁

雲州大塔郡飯田村^{イ、タ}西方寺ノ無量寿ノ尊像ハ、御長五尺計ノ座像ノ箔仏也リ。古ヘヨリコノカタ、靈驗アラタニ在^{マシマ}スト云ヘリ。昔シ同村ノ内、西方寺ニ不^{トオ}遠シテ一ト人リノ土民有リ。婢^{ヤツコ}ノ中ニ一ト人リノ下女アリ。心^ロヲ仏陀ニ帰シテ、二タ心ナカリキ。コノ下女朝^{チャウセキ}夕^{イ、カシク}ノ飯^イヲ炊^{カシク}ゴトニ米^{コメ}才^{サイ}毛^{イマウ}ヲ減^{ケン}シテ、積^{タメ}テ油^{サシ}一^{サン}盞^{セン}ヲ買^キヒ得^キテ、灯^キ明^ミニカ、ケ奉^キリケリ。大家是ヲ聞^{ケム}キ、瞋^{ケム}リヲ呬^{ハシ}テ〔焼損〕ニ居セシ時、秘^ヒニ鉄^{テツ}箸^{シヤウ}ヲ焼^{ヤク}テ、頓^ト〔焼損〕ヲ灸^{キウ}セリ。下女灸^{キウ}ヲ被^ヒルトイヘトモ、少^コモ不^フ熱^{ネツ}シテ、只^タワヅカニ煙^{ケム}ノ跡^{アト}ノミ有^{アル}リケリ。下女ソノ翌朝西方寺ニ詣^{ヨシ}シ堂ニ入^イリテ仏ヲ拜^{イハス}シ奉^キルニ、尊像ノ面ノ左ノ辺ノ耳目ノ中間ニ、二筋^{フタスジ}ノ火箸^{ヒヤシ}ノ灸^{キウ}ノ跡^{アト}有^{アル}リテ、爛^タ、脛^{ケン}タルガ如シ。彼ノ下女是ヲ拜^{イハス}ミ奉^キリ、悲喜灾流シテ下向セリ。見聞ノ諸人嗟嘆セズト云事ナシ。ソレヨリ已^コノ来^キタ世^セアマネク呼^{ヨシ}テ、西方寺ノ焼^{ヤキ}金^{キン}仏^{ブツ}ト称^{ナヅケ}セリ。乃チ件^{コト}ノ下女ガ座^ザ像^{ゾウ}、今ニ堂ノ端^{ハシ}ニ有^{アル}リ。

長二尺計也。予万治元年ノ十月玉造^{ツクリ}ヨリ発足シテ、帰国セル路^{ミチ}辺^ヘノユヘ、彼ノ寺ニ詣^{ヨシ}シテ直^ナキ奉^キリレ拜^{イハス}シ彼ノ尊像ハ无^ナキ紛^{マシ}レ太子ノ御作也リ。焼^{ヤク}キ火箸^{ヒヤシ}ノ跡^{アト}今ニ由^ヨヲ明^{アカ}カニ残^{ノコ}リ、彼ノ寺ノ一僧語テ云ク、古来ノ縁記有^{アル}リシヲ（明暦三丁酉）去年ノ春盜賊^{トウソク}ノ為^メニ失^シ亡^チセリ。件ノ縁感ハ凡^{ソドモ}ッ八百年已前ノ事也ト云ヘリ。



『少女感応記』では、話題の舞台が西方寺そのもので、焼鉄箒をあてるのは当寺の住持であり、あてられるのは寺内で給仕する老婆なのである。焼鉄箒をあてられた老婆の叫声は叫喚地獄の罪人に譬えられ、身代わりとなった本尊の面からは滝のように血が流れたと記している。そして当の住持は血を吐いて死ぬという現報を被り、本尊からは今も血が止まることがないと書き添えている。

月感『近世善悪華報録』に比して、格段にその悲惨さが激しく、聞くものをしてリアルな映像世界へ引き込むような内容である。『少女感応記』は地獄めぐりを題材に、少女をしてその証言者とせしめ、現実世界との交通をになわせている。そのリアルさは現実の日常世界に異界の行為が反映されるということと表現されている。たとえば、少女が死んで宮殿の様子を見る場面では、

門中之宮殿魏々トシテ光浄厳麗シ。其柱映徹シテ宛モ如ニ瑠璃ノ。并レ之歛喜之涙匠シレ忍。其時小女面容流涙也

とあって、割注の形で、異界の少女の歛喜の涙が現実の涙として示されている。少女が従弟僧木端によって追い出されようとする時に叫び声を挙げるが、その様子もこう示された。

彼僧呵シテ云。是非スミ汝カ可シ居之所ニ云已テ覚フレ推出スト之。其時小女大ニ叫フ。其声亦出小女ノ死骸ヨリ

このような例は『少女感応記』で散見されるところであった。

また、円策の評解中、『感応伝』をひきあいに安義の業報を紹介しているが、その瘡を生じたことを「殺生の華」とする。「華」は「華報」を言うのであろう。華報とは、果報の前段階としての業報をいう。華開いてのち果が実るという因果のあり方に則るもので、『涅槃経』では阿闍世の業報をかくあらわすところである。「華報」という概念のあり方につ

いて、近世的な信仰の俎上に載せた時、どのような唱導世界が想定されるのか、月感の『華報録』とともに考えてみたいところだ。

以上、『小女感応記』について、ごく簡単な所見を草した。当地に伝わる伝吉伝説との関係や、円策の評の中で引き合いに出された文献のテキストの問題など多くの課題を積み残しているが、今後の課題としたい。

(注) 拙稿「阿蘇江善寺蔵『近世善悪華報録』研究と翻刻」(石橋義秀・寺川眞知夫・廣田哲通・三村晃功編『仏教文学とその周辺』和泉書院・一九九八年刊)

【凡例】

- 一、翻刻文字は原則として通行の文字を用いた。ただし、「无」など一部について不統一なところがある。
- 一、私意にて句点を施した。
- 一、虫損などの理由で判読不能箇所は■とした。
- 一、当て字と思われるもので明らかなものについてはこれを正した。例：「漠大」…「莫大」
- 一、いわゆる異体字・省文は、次のように表記した。
ノ…シテ 芴…州 𪛗…野 𪛗…出 无…無 𪛗…歛 𪛗…貌 𪛗…呵 𪛗…句 𪛗…羅 𪛗…因 𪛗…惡 𪛗…沉 𪛗…沈
𪛗…拳 𪛗…熱 𪛗…雖 𪛗…聞 𪛗…勢 𪛗…飯 𪛗…事 𪛗…奕 𪛗…德 𪛗…穢 𪛗…肉 𪛗…契 𪛗…教
𪛗…風 𪛗…厚 𪛗…采
- 一、翻刻に続き、私に訓読を試みた。併せて参照願いたい。

越後蒲原郡小女感応記

越後蒲原郡小女感応記全

小女感応記

越之後州蒲原郡金津保羽生田村ニ有ニ野夫医^{ハニウ}。其名云ニ伝吉ト。有ニ一男一女子。男子者自ニ幼歳ニ為ニ出家ト。女子者天性有ニ孝心。為^メレ人所知ル也。皆元禄第八己亥十二月廿日女子切死^{セチシ}。然トモ心温^{ムネ}ニシテ而時々出ニ悲喜之声ヲ。故ニ不^レ葬之。経テニ六日ヲ而忽チ蘇ル。身体如ニ平日^{ツチノト}无^レ恙矣。語テニ父母ニ云。我レ臨テ欲ニ命終ント見ニ(1・オ)一ノ黒闇処ヲ。漸ク行クニ出^{クワ}ニ曠茫タル野辺ニ。忽尔トシテ見^ミニ於化僧ヲ。如ニ十五六歳之人ノ。彼ノ僧女ニ与^カ下^カ一ノ怪物ヲ。形如^{形如}并檣葉一枚ヲ上^上令^レ哺之。又有ニ一樹。名ニ毘蘭ト。欲スレ折ントニ小枝ヲ。而見^ミニ其梢ヲ懸タリニ人ノ皮ヲ。故ニ怪ミ恐テ而不^レ折ヲ。而後チ漸ク進ニ忽チ僧俗男女三百有余自ニ諸所リ集テ而皆僧ヲ為ニ先達ト。趣キ向フニ見^ミニ有^レニ宮殿前ノ化僧迎ニ四十人ヲ入^入ラシムニ于門中ニ。小女モ其一リ也。門中之宮殿魏々トシテ光淨嚴麗シ。其(1・ウ)柱映徹シテ宛モ如^モニ瑠璃ノ。并^レ之歎喜之淚叵^{其時小女面}シ忍。於其堂中有^{容流涙也}ニ数多ノ僧俗。皆微笑之貌ハセ也。其ノ中ニ有^ツニ從弟ノ僧。号ニ木端ト。此僧本羽生田村淨福寺也。某甲之子弟ニシテ而苦行精進之人也。七年以前逝去ス。今在^在リニ其堂中ニ語ニ小女ニ云。汝何ソ至^至レルニ于此ニ。父母悲歎スルコト甚シ。速ニ歸リ去^去レト云云。小女答云吾不^レ計来^来ニ如^レ是嚴淨ノ国土ニ。願クハ欲^レニ留住^留ント也。彼僧呵シテ云。是非ス^スニ汝カ可^レシ居之所ニ。云已テ(2・オ)覺^覺フレ推出スト之。其時小女大ニ叫フ。其声亦出^{其声亦出}ニ小強テ欲^レ隱^隱レントニ檐ノ下ニ。無^無ニ所止^止無^無是非^非而出門已ヌ。其時亦遇^遇ニ前化僧ニ。而語^語レハニ木端呵青ノ之語ヲ。化僧ノ云。如^レ是速ニ去^去レト云云。依^レ之欲^レモレ還^還ントニ父母之所ニ而不^レ知^知路ヲ。時ニ化僧授^授ニ八句之陀羅尼ヲ云。誦^誦ニ此神呪ヲ者速ニ弁^弁ントニ歸路ヲ焉。依^レ之持^持ツニ神呪ヲ一遍^遍ニシテ而覺^覺レ之。并又門ノ傍^傍ラニ有^レニ一閣^閣於^於テニ其中ニ見^見ニ僧俗遊

戯スト。小女問_ニ之化僧_ニ。云是生スル人界之(2・ウ)国守及以長者之家_ニ。福德之者也ト。又赴_ニ一河原_ニ有_ニ数多
 嬰兒_ニ。各荷_レ石ヲ。因テ問_レ僧。答云。荷_レ石者一日或有_ニ一度ノ者二度ノ者十度者_ニ。亦有_下自_ニ遠山_ニ荷_レヒ来_レ者近山之
 者_ニ。是依_ニ前業之厚薄_ニ而已。又復於_ニ其中_ニ一_ニ小女有_ニ從弟挽_{ケル}腰_ニ者荷_レ石而自_ニ山麓_ニ来_レ。見_ニ不_レ得_レ進_{コトヲ}而
 悲_ヲ。其時小女拳_レ声啼泣ス。小女ノ死骸
ニ有_ニ叫声_ニ而シテ後チ忽_レ尔シテ一山為_ニ猛火ト。彼僧以_ニ錫杖_ニ救_レ之。漸ク(3・オ)一兩人
 入_ニ於_ニ福中_ニ。小女問_ニ其故_ヲ。化僧答云。入_ニ吾福中_ニ者ノ人界ノ父母兄弟等為_ニ追善_ヲ者也。属等作_レ惡而不_レ顧_ニ
 亡者_ニ族_ヲ多シ。故不_レ入_ニ吾手_ニ者多也。又復小女カ從弟或日有_ニ欲_レ赴_ニ新瀉_ニ。而溺_レテ水_ニ死_上。亦見_ニ其相_ニ
 小舟二艘組合_テ欲_{シテ}渡_レ河覆_{ハス}レ舟ヲ。叫而入_レハ_ニ河中_ニ見_下数多ノ小蛇噉_ヲ其頭上_ヲ。或見_下二人三人所_ニシテ繫カ
 沈ム者忽チ火燃_テ燒失_ヲ。或見_下大勢拳_レ声_{サカノ}折_ニ河ノ上_ニ(3・ウ)刃流_テ而段々切割_ヲ。或有_下罪人大キニ叫声ノ下
 ニ猛火起_テ尽_{シテ}燒_上。或見有_ニ大ナル橋牛頭馬頭ノ之鬼逐_テ諸罪人ヲ令_レ渡_ラ橋漸々細ク成。終ニ橋折_レテ没入_{スレ}ハ亦
 猛火燃来_ニ燒_中罪人_ヲ。或見_下大鑊中ニ熱湯充滿_{セリ}。黑色ノ大鬼燒_キレ火湧_レ湯。罪人從_レ空倒_マ、ニ落_レハ鑊中ニ熱洋鉄
 終ニ涸_シ罪人被熬_{イラ}如_ニ黑炭_ノ一時ニ忽チ火起_テ燒_尽ヲ。其時鬼向_レ鑊吹_レ息。熱鉄如_ニ本湧_ク。苦相同前。又有_ニ大ナル
 男_ニ。為_メニ小童ノ被_ルニ(4・オ)刃殺_ニ。僧語_ニ小女_ニ云。汝チ見_ルヤ否ヤ。此大男以_レ口殺_レ人。故今受_ニ如_レ是報_ニ。小
 女小罪モ亦受_ルヤ其報_ヲ乎。僧答。受_レ之令知_ニ其証_ヲ。汝去年七月為_ニ採薪_ノ入_レ山ニ時樹枝ニ有_ニ虫。汝以_ニ小枝_ヲ
 刺_ス之。二度シテ而落_レ地。尤虫雖_レ不_レ死惱_レ虫之報有。汝則眼下口傍生_レ瘡。其現報ナリ也ト矣。小女聞_レ之且ツ驚_キ且ツ
 怖_ル。依_レ之活而後向_レ鏡覺_レハ自面_ヲ依然トシテ生_レ瘡焉。又僧告_ニ小女_ニ云。汝チ還_ニ人界_ニ後チ(4・ウ)勿_ニ放逸_ニ。
 專_ラ念_ニ三寶_ヲ濯_ニ三衣_ニ。其功德莫_ニ大ナリ也。勿_レ捨_ニ濯衣之汗不_レ淨之地_ニ。又捨_シ時必三拜_{セヨ}矣。捨_レ川魚鼈蝦_レ其汁
 ヲ者從_ニ小身軀_ニ大身_ニ捨_レハ_ニ山草木諸虫軀_ニ生終近_ニ仏道_ニ云云。尔来一向誦_ニ陀羅尼_ニ欲_レ還_ニ本家_ニ。中路ニ又有_下二
 鬼以_ニ呵責之鋒_ヲ待_ニ罪人_ノ之相_ヲ。其形勢甚_ニタ可_レ怖。雖然一心ニ如_ニ僧命_ノ誦_{シテ}神呪_ヲ過_ニ是處_ヲ。見_レハ前路
 ヲ者有_ニ一男士_ニ。向_ニ小女_ニ合_セ掌語_云。吾ハ是奥(5・オ)州会津細川七兵衛次男才兵衛ト云者也。今月廿一日ニ死

ス矣。然ルニ某在ニ人世ニ。貪欲無道ニシテ而以ニ二舛二秤ヲ^(一掛)■ニ惑於人ヲ。更ニ不_レ信ニ後世有ルコト。依_レ之不_レ婦ニ三宝ニ。故忽赴_ニ地獄ニ。汝チ有_ニ善縁_一。値_ニ婦人界ニ。予カ一ノ幸也。伝_ニ此赴_ヲ吾本国之眷属ニ。馮_ニ為_レ吾作_ニンコトヲ_一追善救苦之法ヲ。尔者遣_ニ証拠物ヲ_一。小女不_レ語云。我幼年也。奥州不_レ知_ニ方角ヲ_一。云何シテ通_ニ之ヲ_一。件男ノ且ツ恨且ツ泣ク。其時二(5・ウ)鬼飛ヒ来テ提ケ去ルト云云。而シテ小女六日而蘇息ス。父母悦テ而問_ニ安不_ヲ。対シテニ父母ニ語_ニ上事ヲ_一。亦呼_ニ伯父_一告テ云。公事トス博奕ヲ。是大罪也。且_ニ壯歲之有盜_ニ他之金銀ヲ_一削_ニ取_ニルコト_一一女ヲ雖_レ未_レタ_レ死其報有_ニテ惡道ニ_一如_ニ待ツコト有_ニカ_一。速ニ懺悔シテ而歸玉ヘト_ニ於三宝_一矣。伯父聞而冷シ_ニ心_一報面ス。依_レ之近里遠村運_ニ歩人々_一問_ニ先祖之生処ヲ_一。一モ不_ニ擬議_一。生平所作之事業死生之年月日時当_ニ来_ニ之苦報_一(6・オ)随_ニテ問_ニ答_一フ_レ之。如_ニ谷響ノ_一。然トモ十人之内過半言_ニ隨_ニ惡道_一。其一々之事不_レ違_ニ枚_一拳スルニ云云。是予カ小弟聞_ニ小女之直説_一。膳_ニ享スルコト_一之_ニ如件。雖_レ然有_ニ信_ニスル_一之者_一有_ニ誹_ニ之者_一。故ニ予評シテ曰

小女之語雖_レ似_ニ謔言_一有_ニ不_ニ謔言_一ナラ_ニ處_一。先ッ死而見_ニ一ッノ淨国_一者地蔵所居之土歟。即地蔵經ノ所説閻魔王(6・ウ)界之辺ニ有_ニリト_一地蔵之淨土ニ云云。又三宝感応錄ニ拳_ニク_一閻魔王界之辺ニ有_ニ化城_一。以_ニ下品之善_一住_ニ彼處_一矣。經釈明白也。是不謔言之一也。亦八句之陀羅尼者不_ニ空_一羅索神變真言經之所説大興善寺三藏不_ニ空_一奉詔ヲ詔ル也。彼經云。尔時觀世音菩薩即於_ニ仏前_一諦_ニ觀_ニ一切_一説_ニ薄偏解脫心_一ノ真言ヲ曰。唵_ニ没_ニ二合囉_一歌麼_一廢_ニ灑陀羅_一二駄囉_ニ駄囉_一三地利地(7・オ)利四度嚧度嚧五_ニ絳曼_一綽_ニ入縛_一羅六_ニ畝佬_一訖七_ニ莎縛_一二合_ニ訶_一若人六時ニ倍々復精進シテ如_ニク_一法_ニ嚴_一治_ニ身_一器ヲ_レ依_ニ法_一持誦シ満_ニ一_一洛又ニ。是業成熟シテ觀世音菩薩現_ニ金色身_一ヲ。当_ニ截_ニ無始一切ノ根本ノ重罪_一ヲ。若不_レ現者復倍々精進シ誦シテ満_ニ二_一洛又三洛又ニ。又是業成熟觀世音菩薩定_ニ當_ニ現_一身執_ニテ_レ手指示。西方淨土阿陀_ニ仏坐_一ニ寶蓮花師子之座ニ。復得_ニ阿陀_一仏(7・ウ)手ヲ以摩_ニヘルヲ_一其頭ヲ謂_ニ同_ニ彼ノ土ノ一切菩薩福命功德_一捨_ニ此身_一ヲ。後チ往_ニキ_ニ於西方安樂国土上品蓮花_一具_ニ諸ノ相好_一識_ニ宿命智_一得_ニ不_レ退轉_一已上。如是深秘ノ密經田家之野人大人スラ尚_ニ不_レ可_レ

知。況ヤ小女ヲヤ。是不譚言之二也。不者引導之僧者地藏歟。亦觀音歟。亦不可知。地藏者六道之能化。觀音亦同。正
 ク向テニ小女ニ可尋結縁ノ菩薩也。又復一閣ノ有僧(8・オ)俗遊戲ル者。是生ト人界国王長者之家一矣。是譬喻經
 ノ所説。餓鬼五百歌舞シテ而行。好人五百啼泣シテ而遇ヲ或人有問仏。仏ノ言ク餓鬼ノ家ノ子孫為メニ其カ作レ福當
 得ニ解脱。故ニ歌フ。好人カ家ノ子孫唯行ニ殺害ヲ將ニ受ニ大苦。故哭スト已上。加之荷石ヲ遠近者堆厭地獄亦名衆合地獄之類
 歟。化僧袖中入不入者皆是善惡之業感歟。是不譚言之三也。(8・ウ)又復入山刺レ虫生レ瘡報者雖似譚語ニ考ニ感応伝
 ヲ秦ノ安義高陸ノ人也。從少至長放鷹射獲ス以為ニ家業ト。一日所殺不レ知ニ幾千ト云コトヲ。邪見ノ人云。安義好
 モレ殺身无恙カ。生年五十有八ニシテ忽発ニ瘡病ヲ。膿血穢シテ身臭氣不レ可ニ親附。義婦日出之時見ニ瘡一々ノ瘡皆
 似タリニ鶏ノ嘴シニ。呼ニ兒子ヲ皆云似ニ鶏ノ嘴ニ。更ニ告親屬ニ。皆云ク。如トレ是。時々如動クカ。尔時(9・オ)
 馳レ使請ニ僧道俊法師。々来テ問フレ之ヲ。義云。身心(五相)ウスツカ春。閉レハレ目見ニ無量ノ鳥獸唯齧啄ニ食骨肉ヲ。願師救療
 セヨ。俊ノ曰。現苦如レ此。況ヤ復後苦ヲヤ。須懺悔ヲシテ其罪ヲ歸ニ於三宝ニ及以告普賢ノ像ニ云云。以レ是思ニレ之生ハレ瘡
 是殺生之華也。報罪有ニ輕重。故有ニ其差異。至重キ者ノハ如レ闍世ノ。是不譚言之四也。又汝還ニ人世ノ者婦ニ三宝ニ濯
 於三衣等ノ(9・ウ)善自レ本小女所不レ知。善惡之報。応豈可シヤ諷。不譚言之五也。奥州会津一男士之事追テ伝ニ其
 事ヲ。而モ其名字死日恰モ如符契ノ。依之親屬尋求来テ聞ニ其事実ヲ。落涙万行也。是故還レ国ニ執リニ行フト慰懃之追
 善ヲニ云云。然ニ斗之事者法花陀羅尼品云。斗秤ヲ以欺ニ誑スト人ヲ一矣。文句言。斗ハ則小ヲ以出シテ大ヲ以入。秤ハ則輕ク
 出シテ重ク入ル。(10・オ)欺盜之尤ハナハタシキ也。世ニ有小斗ヲ以出シ大斗ヲ以入ルニ震銘スルニ其皆ニ。斯罪亦不レ輕也。輔正
 記云。
 震ハ雪也。此ノ土ノ人被ニ霹靂ヲ死ス。背ノ上ニ云。市中ニ用ト小斗ヲ。五字也。皆不レ著中央ノ直
 星ヲ。此土ニ無人ノ識者。西国ノ婆羅門来テ見テ識テ著中央ノ一ノ直星ヲ。則成ニ五字ト矣。是不譚言之六也。又復伯父カ博奕ハク壯年之陰惡所
 人之不レ知而明カニ告レ之。且ツ教ニ懺悔帰仏ヲ。而伯父赧顔而伏ニ膺ス之ヲ。是又不譚言之七ツ。又近郷遠村亡父母
 等之生平(10・ウ)之所作死亡之年月明ニ如ニ旧識。又受報之輕重善惡豈小女カ出シテ於臆識タリ乎。是不譚言之八也。
 故評シテ其ノ五三ヲ伝ニ末聞ニ。噫道也者在ニ正理ニ。而不レ有人伝言ク。依義不レ依語ニ。依法ニ不レ依人ニ

云云。縱令ヒ雖ニ小女之野語ト一有ラハレ義寧ロ捨レ之乎。知法之人知ントレ之云云。

元禄九丙子春仏涅槃日（11・オ）

越之後州新潟県正福現住

在中幹荷風子釈円策評譚（11・ウ）

雲州大原郡飯田村無量山西方禪寺本尊阿弥陀如来春日之作也。此本尊亦者号焼鉄仏。昔日寺内有老婆。発於信心毎朝供仏餉。敬重懇懃也。然住持之僧邪欲之心深シテ而呵責之。或日為レ赴ニ他所ニ鎖シテ於米櫃ニ遮ニ於供仏。故老婆怒四住僧之無道而不ルコトヲ知ニ仏恩ヲ。以レ斧折レ櫃供仏如レ常矣。住僧帰レ寺看テ其形勢ヲ瞋嫌之（12・オ）心甚タ烈シテ以ニ焼鉄箸ヲ貫ヌクニ老婆カ之面上ヲ。其叫声恰モ如ニ叫喚地獄之罪人。而後チ老婆心安然トシテ而面上無ニ一疵。然本尊ノ面上血流ルコト如レ滝。遊童愕然告之。見聞之僧俗無レ不ニ驚嘆ニ也。良暫アリテ而住僧失ニ於本心ニ狂走スルコト半里ハカリ也。忽吐テ血而死ス事。本尊于今血流ル。雖ニ以レ漆修ニ補スト之其血不止マラ云云。彼寺者三山和尚之開（12・ウ）基。現住金藏主筆記之趣如是。（13・オ）

【試訓読】＊割注は（ ）内に小字で表記した。また、振り仮名はこれを省略した。適宜段落を設け、通読の便をはかった。誤写と考えられるもので、類推できるものについては《 》内に示した。

越後蒲原郡小女感応記

越後蒲原郡小女感応記全

小女感応記

越之後州蒲原郡金津保羽生田村に野夫医あり。その名を伝吉といふ。一男一女子あり。男子は幼歳より出家となる。女子は天性孝心あり。人のために知るところなり。

ときに元禄第八己亥十二月廿日、女子切死す。しかれども心温かにして、時々悲喜の声を出だす。故にこれを葬らず。六日を経て、たちまち蘇る。身体平日のごとく、恙なし。父母に語りていはく。われ命終らんと欲ふに臨みて、一の黒闇処を見る。漸く行くに曠茫たる野辺に出づ。忽尔として化僧を見る。十五六歳の人のごとし。かの僧、女に一の怪物と(形束束のごとし)并せて檣葉一枚を与ふ。これを嘔ましむ。又、一樹あり。毘蘭と名づく。小枝を折らんと欲す。しこうしてその梢を見るに人の皮を懸たり。故に怪み恐れて折らず。しかして後、漸く進むに、たちまち僧俗男女三百有余、諸所より集りて、皆僧を先達となす。向ふに赴き、宮殿あるを見、前の化僧四十人を迎へ、門中に入らしむ。小女もその一人なり。門中の宮殿魏々として、光浄厳麗し。その柱映徹して、あたかも瑠璃のごとし。これに并せて歓喜の涙忍びがたし(その時小女、流涙の面容なり)。その堂中に数多の僧俗あり。皆微笑の貌ばせなり。

その中に従弟の僧あり。木端と号す。この僧、本羽生田村淨福寺(禪宗也)某甲の子弟にして、苦行精進の人なり。七年前以前逝去す。今、その堂中にありて小女に語りていはく。汝何ぞここに至れるや。父母悲歎すること甚し。速かに帰り去れと云云。小女答へていはく、われ計らずして、かくのごとき厳浄の国土に來たれり。願はくは留住せんと欲ふなり。かの僧、呵していはく。これ汝が居すべき所にあらず。云ひ已りてこれを推出すと覺ふ。その時、小女大に叫ぶ(その声もまた小女の死骸より出づ)。しひて檐の下に隠れんとおもふ。所止する無く、是非なくして出門しやみぬ。その時また前の化僧に遇ふ。しかして木端、呵青の語を語れば、化僧のいはく。かくのごとく速やかに去れと云云。これによりて、

父母の所に還らんと欲ふも、路を知らず。時に化僧、八句の陀羅尼を授けていはく。この神呪を誦すれば、速やかに歸路を弁へんと。これによりて神呪を持つこと一遍にしてこれを覚ゆ。

また門の傍らに一閣あり。その中において僧俗遊戲すと見ゆ。小女この化僧に問ふ。いはく、これは人界の国守、及んでもつて長者の家に生ずる。福德の者なりと。また一河原に赴くに数多の嬰兒あり。各石を荷ふ。よつて僧に問ふ。答へて云はく。石を荷ふ者、一日或は一度の者、二度の者、十度の者あり。また遠山より荷ひ来る者、近山の者あり。これ、前業の厚薄によるのみ。

また、その中に、小女の従弟の腰を挽けるある者、石を荷ひて山麓より来たる。進むことをえずして悲を見ゆ。その時小女、声をあげて啼泣す（小女の死骸に叫声あり）。しかして後、たちまちにして一山猛火となる。かの僧錫杖をもつてこれを救ふ。漸く一兩人、福中に入る。小女その故を問ふ。化僧答へて云はく。わが福中に入るものは、人界の父母兄弟等に追善をなす者なり。属等に惡をなして、亡者を顧ざる族多し。故にわが手に入らざる者、多なり。また小女が従弟、ある日、新潟に赴かんと欲ふとき、水に溺れて死するあり。また、その相を見るに、小舟二艘組合て、河を渡らんと欲して舟を覆はす。叫びて河中に入れば、数多の小蛇、その頭上を噉ふを見る。或は二人三人所して繋かれ、沈む者たちまち火燃えて焼失するを見る。或は大勢声をあげて河の上に祈る。刃流れて段々切り割くを見る。或は、罪人大きに叫ぶ声の下に、猛火起きて尽して焼くあり。或は大なる橋あり。牛頭馬頭の鬼、諸罪人を逐ひて、橋を渡らしむ。漸々細くなる。終に橋折れて、没入すればまた、猛火燃え来たるに、罪人を焼くを見る。或は大鑊中に熱湯充滿せり。黒色の大鬼、火を燒き、湯を湧かす。罪人空より落つれば、鑊中に倒るるままに、熱湯鉄終に涸し、罪人熬らる。黒炭のごとし。時にたちまち火起きて、焼き尽すを見る。その時、鬼鑊に向き息を吹く。熱鉄もとのごとく湧く。苦相同前なり。また、大なる男あり。小童の為に刃殺さる。僧小女に語りていはく。汝、見るや否や。この大男口をもつて人を殺す。故に今、かくのごとき報ひを受く。

小女、小罪もまたその報ひを受るや。僧答ふ。これを受け、その証を知らしむ。汝、去年七月、採薪の為、山に入りし時、樹枝に虫有り。汝、小枝をもつてこれを刺す。二度して地に落つ。尤も虫死せずといへども、虫を悩ます報ひあり。汝、すなはち眼下口傍に瘡を生ず。その現報なりと。小女これを聞き、かつ驚き、かつ怖る。これによつて、活きて後、鏡に向ひ自面を覓れば、依然として瘡生ず。また僧、小女に告げていはく。汝、人界に還りて後、放逸するなかれ。専ら三宝を念じ、三衣を濯ふべし。その功德莫大なり。濯衣の汁を不浄の地に捨つるなかれ。また、捨し時は必ず三拝せよ。川に捨つれば、魚鼈その汁を啜るものは、小身を大身に転じ、山に捨つれば、草木諸虫、生を転じ終に仏道に近づく云云。

尔来、一向に陀羅尼を誦し、本家に還らんと欲ふ。中路にまた、二鬼呵責の鋒をもつて罪人を待つ相あり。その形勢はなはだ怖るべし。しかりといへども、一心に僧命のごとく、神呪を誦してこの処を過ぐ。前路を見れば一男士あり。

小女に向かひ掌を合はせ語りていはく。われはこれ奥州会津細川七兵衛の次男、才兵衛といふ者なり。今月廿一日に死す。しかるに某、人世にあり。貪欲無道にして二舛二秤をもつて人を■惑^虫す。さらに後世の有ることを信ぜず。これによつて三宝に帰せず。故にたちまち地獄に赴く。汝、善縁あり。人界に帰るに値ふ。予が一の幸なり。この趣をわが本国の眷属に伝へよ。われの為に、追善救苦の法をなさんことを憑む。しからば証拠物を遣はさん。小女語らはずしていはく。われ幼年なり。奥州の方角を知らず。いかんしてこれを通さん。件の男の、かつ恨み、かつ泣く。その時、二鬼飛び来たりて提げ去ると云云。

しかして、小女六日して蘇息す。父母悦びて安否を問ふ。父母に対して、上事を語る。また伯父呼びて、告げていはく。博奕を公事とす。これ大罪なり。そのうへ、壮歳これあり。他の金銀を盗み、一女を削り取ること、いまだ死せずといへども、その報ひ惡道にありて、待つことあるがごとし。速やかに懺悔して三宝に帰したまへと。伯父聞きて心を冷やし、赧面す。これによつて、近里遠村歩を運び、人々、先祖の生処を問ふ。一つも擬議せず。生平所作の事業、死

生の年月日時、当来之苦報、問に随ひてこれに答ふ。谷響のごとし。しかれども、十人の内、過半は惡道に随ふといへり。その一々の事、枚挙するに遑あらず云云。

これ予が小弟、小女の直説を聞く。これを瞻写すること、くだんのごとし。しかりといへどもこれを信ずる者あり、これを誹する者あり。故に予、評していはく。

小女の語、謔言に似たりといへども、謔言ならざる処あり。まづ、死して一つの淨国を見るときは、地藏所居の土歟。すなはち『地藏經』の所説、閻魔王界の辺に地藏の淨土ありと云云。また、『三宝感応錄』に閻魔王界の辺に、化城あることをあぐ。下品の善をもつて、かの処に住す。經釈明白なり。これ不謔言の一なり。

また、八句の陀羅尼は、『不空羼索神變真言經』の所説、大興善寺三藏不空、詔を奉じて訳するなり。かの經にいはく。ときに觀世音菩薩、すなはち仏前において、諦に一切を觀じ、薄偏解脱心の真言を説きていはく。唵没二合 囉歌麼一 廢灑陀羅二 駄囉駄囉三 地利地利四 度嚧度嚧五 娑曼羼入縛羅六 畝佬訖七 莎縛二合 訶若人、六時にますます、また法のごとく精進して、身器を嚴治し、法により持誦し、一洛叉に満ちぬ。是業成熟して觀世音菩薩、金色身を現ず。まさに無始一切の根本の重罪を截つべし。もし現ぜずば、またますます精進し誦して、二洛叉三洛叉に満ずべし。また是業成熟の觀世音菩薩、定んでまさに身を現じ、手を執りて指示すべし。西方淨土阿陀《阿弥陀》仏、宝蓮花師子の座に坐す。また阿陀《阿弥陀》仏、手をもつて、その頭を摩べるを得。謂はく、彼の土の一切菩薩福命功德に同じて此身を捨つ。後、西方安樂国土上品蓮花に往き、諸の相好を具へ、宿命智を識り、不退転を得。已上。かくのごとく深秘の密經、田家の野人大人すら、なほ知るべからず。いはんや小女をや。これ、不謔言の二なり。

不者引導の僧は、地藏か。また觀音か。また知るべからず。地藏は六道の能化なり。觀音もまた同じ。正しく小女に向かひて結縁の菩薩を尋ぬべきなり。また一閻の僧俗遊戲する者あり。これ人界国王長者の家に生ずと。これ『譬喻經』

の所説なり。餓鬼五百歌舞して行く。好人五百啼泣して遇ふを、或人仏に問ふことあり。仏のたまはく、餓鬼の家の子孫、それが為に福をなし、まさに解脱を得べし。故に歌ふ。好人が家の子孫、ただ殺害を行じ、まさに大苦を受くべし。故に哭すと。已上。しかのみならず、石を荷ふ遠近は堆厭地獄（また衆合地獄と名づく）の類か。化僧の袖中に入る入らぬは、皆これ善惡の業感か。これ不譚言の三なり。

また山に入り、虫に刺され、瘡を生ずる報ひは、譚語に似るといへども、『感応伝』を考ふるに、秦の安義は高陸の人なり。少きより、長に至るまで鷹を放ち射獲するに、もつて家業となす。一日に殺すところ、幾千といふことを知らず。邪見の人はく、安義は殺を好むとも身恙なし。生年五十有八にして、たちまち瘡病を發す。膿血身穢して身の臭氣、親附すべからず。義が婦、日出の時に瘡を見るに一々の瘡、皆鶏の嘴に似たり。兒子を呼ぶに皆、鶏の嘴に似たりといふ。さらに親屬に告ぐ。皆いはく、かくのごとしと。これ時々動くがごとし。ときに使を馳せて僧道俊法師を請ふ。師来たりてこれを問ふ。義いはく、身心うすづくがごとし。目を閉づれば、無量の鳥獸噬齧し、骨肉を啄食むと見ゆ。願はくは師治療せよ。俊のいはく。現苦かくの如し。いはんや、また後苦をや。すべからくその罪、懺悔をして三宝に帰し及び、もつて普賢の像に告ぐべしと云云。これをもつて思ふに、瘡を生ずるはこれ、殺生の華なり。罪に報ひんに軽重あり。故にその差異あり。至て重き者は、閻世のごとし。これ譚ならざる言の四なり。

また汝、人世に還らんは三宝に歸し、三衣等の善を濯がんは、もとより小女知らざるところなり。善惡の報ひなり。まさにあに誣すべけんや。譚ならざる言の五なり。

奥州会津の一男士の事、追てその事を伝ふ。しかもその名字死日、あたかも符契のごとし。これによりて親屬尋ね来て、その事実を聞く。落涙万行なり。かるがゆへに、国に還り、慇懃の追善を執り行なふと云云。しかるに、二斗の事は、『法花陀羅尼品』にいはく。斗秤をもつて人を欺誣すと。『文句』にいはく。斗はすなはち、小をもつて出だして大をもつて入る。秤はすなはち、軽く出だして重く入る。欺盜のはなはだしきなり。世にある小斗をもつて出だし、大斗

をもつて入るるに、震その皆に銘ずる。かかる罪もまた軽からざるなり（『輔正記』にはく。震は雪なり。この土の人、霹靂を被り死す。背の上にはく。市中に小斗用ふと。五字なり。皆中央の直昼を著さず。この土に人の識るものなし。西国の婆罪門、来たりて見て、識りて中央の一の直昼を著す。すなはち五字となる）。これ不譚言の六なり。

また伯父が博奕壮年の陰悪、人の知らざるところにして、明らかにこれを告ぐ。かつ懺悔帰仏を教ふ。しかして伯父、赧顔してこれを伏膺す。これまた譚ならざる言の七つなり。

また、近郷遠村の亡父母等の生平の所作、死亡の年月、明らかに旧識のごとし。また受報の軽重善悪、あに小女が臆識たりを出でんや。これ不譚言の八なり。

故にその五三を評して、末聞に伝ふ。噫、道なるは正理にあり。しかして人にあらざる仏のたまはく。義によりて、語によらざれ。法によりて、人によらざれと云云。たとひ小女の野語といへども、義あらばむしろこれを捨つるや。知法の人、これを知らんと云云。

元禄九丙子春仏涅槃日

越之後州新潟県正福現住

在中幹荷風子积円策謹評

雲州大原郡飯田村無量山西方禪寺、本尊阿弥陀如来、春日の作なり。この本尊または焼鉄仏と号す。昔日、寺内に老婆あり。信心を発し毎朝仏餉を供ふ。敬重懇懃なり。しかるに住持の僧、邪欲の心深くして、これを呵責す。或日、他所に赴かん為、米櫃に鎖して供仏を遮ぐ。故に老婆、住僧の無道にして、仏恩知らざること怒る。斧をもつて櫃を折り、供仏すること常のごとし。住僧寺に帰り、その形勢を看て瞋嫌の心、はなはだ烈しくして焼鉄箸をもつて、老婆が面上を貫く。その叫声あたかも叫喚地獄の罪人のごとし。しかして後、老婆の心安然として、面上一斑もなし。しかる

に本尊の面上、血流ること滝のごとし。遊童愕然としてこれを告ぐ。見聞の僧俗驚嘆せざるものなし。やや暫ありて住僧本心を失ひ、狂走すること半里ばかりなり。たちまち血を吐て死す事。本尊、今に血流る。漆をもつてこれを修補すといへどもその血止まらずと云云。かの寺は三山和尚の開基なり。現住金藏主筆これを記す趣、かくのごとし。